

# さりとは陽氣の町と住みたる人の申き

——「たけくらべ」私注——

山根賢吉

「たけくらべ」を読んでいて気にかかることばの一つに「さりとは」がある。すでに冒頭の一節に、

……明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は仏くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申き。(印筆者。以下同様)

とある。

関良一氏はこの「さりとは」について、『さうとは』『さういふことば』の意の副詞であるが、一葉の用法では『さうとはいえ』あるいは『それは』くらい<sup>の</sup>意であろう。(『大音寺前——たけくらべ』——「解釈と鑑賞」昭32・?)と注しておられる。手もとの辞書類によれば、『岩波 古語辞典』では「副詞」として①それにしては。さうとは。②非常に。とても

(例文は省略)とあるが、『広辞苑』は「接続詞」として「①さうとは。さういうこととは。②それはそれは。」としている。

ところが『学研国語大辞典』では、

□「接続」 「文」(上の文の内容を受けて)さうであると  
は。さうとは。□「感」これはまた。これはこれ

となっており、小学館の『日本国語大辞典』はこれとほぼ同じく、

「接続」①先行の事柄を受けて、後続の判断が行われることを示す。さうだとは。さうとは。②(①から転じて、感動をこめて用いる)さてもまあ。さてさて。

とある。更に『角川国語中辞典』では、

①接続 さうであるとは。さういうこととは。②副 これ

はまた。なんとまあ。

となっている(いずれも例文省略)。ここで、「さりとは」の品詞を論ずるつもりはないが、ともかくこのことには二通りの意味があることは判明した。

それでは「たけくらべ」冒頭部の「さりとは」はどういう意味であろうか。和田芳恵氏のように「これはまた」(『日本近代文学大系 8 樋口一葉集』)と、前掲の各種の辞書があげている②の意味にとることも可能ではあるが、「大音寺前と名は仏くさけれど」という上文との続き具合から、大野茂男氏のように「その名に似ず」(『たけくらべ通釈』)とか、塩田良平氏のように「それにしては」(『評解 たけくらべ・にこりえ』)ととることもできるわけで、そうすればこれは前掲辞書の①の意味で用いられているということになる。更に一步をすすめて、関氏の注に「そうとはいえ」とあるように、「さりとも」あるいは「さりながら」に近い意味で用いられているとも考えられるのである。

「さりとは」という語の例文は、都合によって省略したが、前掲の諸辞書に引かれているように、西鶴の作品によく見かけられる語である。例えば「好色一代男」では、

我との道路を忘れずとや。さりとはむごき。御ころ入。

(巻一)

我うすぎぬの、あらく。裂きたまふこそ。さりとは、にくしき御しかた。(巻二)

死なれぬ命の。難面くて。さりとは、悲しく。あさましき事共。聞になを不便なる世や。(巻三)

世をおもふゆへに。恋をやひるとの一言。さりとは悲しく。今の有様はづかしやと。(巻六)

とあり、これらは下に「むごし」「にくし」「悲し」などの心情をあらわす形容詞をともなつて、前掲辞書の②の例にあたるものと考えてよい。ただし、

起るを引しめ。此事なくては。夜が明ても帰さじ。さりとは其方も。男ではなひか。(巻五)

は、「岩波 古語辞典」が例文としているように①の意であろう。

一葉が「さりとは」を使っている小説は、筆者の見どころでは、十三編(未定稿を除く)で、その題名と頻度数を示せば次の通りである。

「別れ霜」——1 「経つくえ」——1 「うもれ木」——5 「暁月夜」——2 「琴の音」——1

「花ごもり」——1 「やみ夜」——6 「大つこ

もり」——2 「たけくらべ」——9 「ゆく雲」——1  
「にぎりえ」——1 「裏紫」——1 「わ  
れから」——3

「たけくらべ」に最も多く使われ、以下「やみ夜」「うもれ木」の類になる。

一葉の用いた「さりとは」は、先にあげた「好色一代男」の例のように、前掲辞書の②の意味で用いられた場合が多い。

さりとは口賢しくさま／＼の事がいへたものかな

〔別れ箱〕第十二回

さりとは浦山しきかな、世の事聞かず人に交はらず

〔うもれ木〕第四回

さりとは意地のなき奴 (やみ夜) 二

さりとは無左法な置つきといふが有る物か (にぎりえ)

二)

などはいずれも「までもまあ」とか「なんとまあ」とかいうような意味で使われているわけである。これらはいずれも会話文中に用いられており、「たけくらべ」の中の、

さりとは宜くも学びし露八が物真似、榮喜が処作、

(一)

さりとはをかしく罪の無き子なり、

(四)

さりとは愛敬の無き人と柄れし事も有しが (七)

などは同じ用法と考えられる。「うもれ木」や「やみ夜」の例は、大部分これらと同類と言つてよい。

ところが、

これを色眼鏡の世の人にはほろ酔の膝まくらに耳の垢でも取らせる処が見ゆるやら、さりとは学士さま冤罪の訴へどころもなし。 (経つくえ) 二

さりとは隠居様じみし願ひも、令嬢が心には無理ならぬこ

と、 (暁月夜) 第五回

などの例は、先にあげた「たけくらべ」冒頭部の「さりとは」に近く、さらに、

何ごとにも一筋なる乙女気には無理ならねど、さりとは

欺かはしき迷ひなり、 (暁月夜) 第一回

南無や大鳥大明神、買ふ人にさへ大福をあたへ給へば製造

もとの我等万倍の利益をと人ごとに言ふめれど、さりとは

思ひのほかなるもの、此あたりに大長者のうわさも聞かざ

りき、 (たけくらべ) 一

などは、上文に逆接の助詞「ど」を用いて、「たけくらべ」冒頭部と同一の型であることを示している。これらは前掲辞書の

①の中に入るものであろうが、あえて私見を述べれば、関氏の

言われる「そうとはいえ」に当るものではないかと思う。①をやや逸脱した用法と言えるかも知れない。「たけくらべ」の次の例も同じくらいと見ていいのではないかと思う。

同級の女生徒二十人に揃ひのごむ鞠を与へしはおろかの事、  
馴染の筆やに店ざらしの手遊を買しめて喜ばせし事もあり、  
さりととは日々夜々の散財此歳この身分にて叶ふべきにあらず、 (三)

群れを離れて田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の首筋に紺の腹がけ、さりととは見なれぬ扮粧とおもふに、

(四)  
夫れでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御威光、さりと  
は欲しや、廓内の大きい襟にも大分の貸付があるらう聞  
きましたと…… (四)

また次のように「さりととは」の「さ」に漢字をあてた例がある。  
廓ことばを町にいふまで去りととは耻かしからず思へるも哀  
なり、 (「たけくらべ」八)

これに類するものとして「われから」の  
さしも危ふく思ひし事の左りととは事なしに終りしかと重荷  
の下りたるやうに覺ゆれば、 (六)

をあげることができるが、これらは下に否定的な意味をあらわ

す語をともなつて、「たいして」というほどの意味をあらわしていると考えられる。

以上とりとめもないことを書きつらねてきたが、「たけくらべ」に用いられた「さりととは」は誠に多様と言うべきであつて、これは一葉の他の作品には見られないところである。一葉の用いた「さりととは」については、更に日記・隨筆・未定稿の類を調べる必要があることは言うまでもないが、今は時間的な制約もあつて、生前発表された作品に限り私見を述べた。ご叱正をお願いしたい。

なお青木一男氏の「たけくらべ」(国文対訳シリーズ 評論社)は的確な現代語訳が付されており、種々ご教示を得た。記して謝意を表する。